

見える農と見えない農：農作物からの結びつき

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2015-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 玉潔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8068

見える農と見えない農

～農作物からの結びつき～

李玉潔

- 1 はじめに
- 2 農業から漁業へ
 - 2.1 用宗の自然条件
 - 2.2 用宗の農業史
 - 2.3 現在の用宗の農業
 - 2.3.1 データから見る用宗の農業
 - 2.3.2 漁港の農業
- 3 生業としての見える農
 - 3.1 生業として栽培される農作物
 - 3.2 用宗のモモ栽培
 - 3.3 用宗農業の課題
- 4 生活のための見えない農
 - 4.1 見えない農の特徴
 - 4.2 近郊農業との比較
- 5 おわりに

1 はじめに

今回の調査地である静岡県静岡市駿河区用宗（もちむね）地区は、静岡市の駿河湾に面している、漁業を生業の中心として営む港町である。海も山もあるので、自然が豊かな地域である。温暖な海洋性気候であり、非常に住みやすいと住民が誇りを持っている。漁港として有名な地域の農業とはどのようなものか、漁業と農業とはどのような関係を持っているのか、また、海と山に囲まれた地域の農業とはどのようなものか、ということに非常に興味を持ち、用宗地区の農業について調査を行うことにした。

調べてみると、日本の他の村落と同じように、用宗も古くは農業が主たる生業で、米も多く作っていた。時代を経るにつれて、用宗の農業は衰退していき、漁業に対する依存度が高まっていった。現在用宗では、漁業が生業の中心であり、農業を営む農家は少なく、後継者不足や高齢化など厳しい状態である。農地としての土地利用も減っている。本章では、商品農業としての「見える農」と、生活の一部であって金にならない家庭消費ための

「見えない農」の2つの側面から用宗の農業を考えてみた。

第2節では、用宗の土地や気候などの自然条件を説明した上で、生業の中心が農業から漁業に移っていった経緯を明らかにする。そして、現在の用宗の農業の就業人口や経営面積などの現状を紹介する。第3節では、モモ栽培が代表する用宗の商品経済の農業について日本農業全体の状況と比較しながら、農耕地の減少や後継者不足の課題と原因を分析する。第4節では、用宗の家庭消費のために行われている住宅地における農作物栽培——見えない農——の特徴について事例を取り上げながら分析する。そして、近郊農業と市民農園について考察しながら、用宗の見えない農の意義を考えていく。

2 農業から漁業へ

2.1 用宗の自然条件

用宗地区は静岡市の西南端に位置し、駿河区長田地区の一部である。用宗町内会のホームページによると、用宗の面積は4.06平方キロメートル、人口は4,672人（2010年12月現在）である。長田地区は温暖な海洋性気候であり、降雪がほとんど見られなく雨量が多い地域である。用宗地区の北に城山があって北風を遮断し、冬でも温暖である（長田村役場 1921）。静岡地方気象台ホームページによると、用宗は駿河湾に面する沿岸部に位置して、平均気温が15度から16度と比較的温暖である。年平均降水量は2200ミリメートルから2400ミリメートル、日照時間の平年値は2000時間から2100時間である。

用宗及び隣接する丸子、下川原、広野などの地域は、安倍川、丸子川的作用による沖積地である。『用宗町誌用宗地区土地条件図』によると、用宗地区の土地空間は大きく3つの異なった地形に区分される。それは砂丘、傾斜面地と平坦地である。南アルプスから発し、駿河湾に流入する安部川が、大量の砂を運んで扇状地形を形成した。そして、安倍川の運搬、堆積による土砂によって、海岸部の砂丘はこの平坦地を内部沼地とし、その後、同地区に向かって流下してくる小坂川、丸子川が徐々にこの沼地をさらいながら、陸地にしていった（安本編 1971: 3）。

用宗の土地条件をまとめてみた。①平坦地（沖積地）：水に恵まれているが河川の氾濫によって水に浸かりやすい。この条件により、水田耕作ができるが浸水のリスクがあると考えられる。②山地：土性が微酸性であり、窒素などの要素を多く含むため、柑橘類の栽培に適している。一方、急峻斜面地であるため、労働生産性、植え付け・開墾にかかる諸経費などの問題がある。山地には果樹栽培が良く行われている。③海岸砂丘（砂地）：砂丘は掘削しやすいため、堀込港としての用宗漁港の修築を可能になった。畑、樹木畑が多数あり、漁業生産も行われてきた。用宗地区の集落は数列に発達した砂丘の上に立地している。山地は北側の一番高い所で100メートル内外であり、山麓の広がり狭く、このため傾斜が急であることが特色である。このような土地空間は用宗の生産状態、特に農業生産に影響

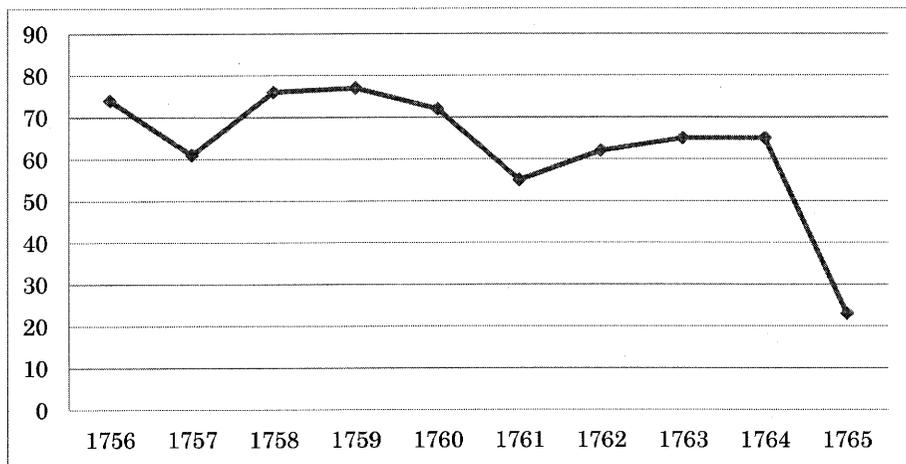
響を与えた。

2.2 用宗の農業史

<江戸時代>

用宗町誌によると、江戸時代には、村の収入の8割以上が田からの収入で、当時の用宗は稲作の村だった。しかし、用宗は低湿地のために水害が発生しやすく、生産力が低かった。田地をわずかししか持っていない村民たちは農業だけでは生活ができないので、8割ほどは漁業を兼業していた。例えば、1753（宝暦3）年には46.2パーセントにもおよぶ水田が水害を受けた。被災した水田は再開発できない場合もあって、田地は減少していった。図1の年貢高の動きが示す通り、用宗の年貢高は変動が大きく、全体的に減少していく傾向が見られる。このような状況の中で、漁業は生活の補助手段として農業収入の不足を補うために行われ、しだいに漁業に対する依存度は高まっていた。

図1 1756年から1765年の用宗の年貢高（米/石）の動き



出典：『用宗町誌』（安本編 1971）をもとに李作成

<明治時代>

明治時代には、各国の市場獲得競争の下で、日本は国家を急速に近代化させた。このような国家の動きは産業にも大きく影響を与えた。政府は地租改正によって土地の私有と貨幣による納税を進めた。用宗地区を含む静岡県の日租改正は1876（明治9）年から始まって、1881（明治14）年までに完了した。その影響で、人々の多くは商品経済へ半強制的に移行した。商品生産の拡大は地域経済の発展を推し進める一方、耕地の所有や収入の格差も拡大した。例えば、当時収益が高かった茶の生産量の過半数は、1人の地主の所有地から生産されていた。1877（明治10）年には用宗の有力な農家である前田、石田、大高、田形、

池ヶ谷の各姓が上田（地味が肥え、収穫の多い田）をほとんど占有する一方、耕地が1反から2反未満の農家が全農家の8割を占めた。また、田畑売買も多くなった。

1874（明治7）年の物産表によると、用宗では農作物としてはサツマイモ、赤砂糖などがあると同時に、水産物の比率が生産量、生産額ともに多かった。特に鯉節の生産量が拡大している。この頃、地主層は積極的に換金作物の導入を推進し、一方、小坂川下流デルタは米の主産地であるが、湧水が多い低湿地で、水害の発生率の高い地域であるため、土地生産性が相当低かった。農業収入は不足し、地域開発によって農耕地が減少し、労働力は農業以外の商業、工業、漁業、会社員などに転換していった。零細農家は他の生業へ転向する傾向が見られた。明治、大正初期は農業、大正、昭和期は漁業、昭和40年代はサラリーマンとして工場、会社に勤務するというように零細な農民は時代によって職業を変えてきた。

茶と赤砂糖の商品化の拡大に伴う加工業の発展も、非農業人口を増加させた。商品農業と農製品加工業、および水産加工業の発達によって、用宗の商品経済は発展した。そして、東海道線の開通、用宗駅の設置、それに伴う流通圏の拡大が漁業の発展を促進した。

<大正・昭和時代>

1909（明治42）年に用宗駅が開設されて以来、交通機関が発達したことによって、用宗の漁業は発達し、人口の増加や住宅の拡大ももたらした。大正期には土地開発と耕地整理事業が始まった。

当時の作物にはモモ、ビワ、カキなど多様な果樹がある。当時、この地区は旧海岸砂丘列上に位置し、砂壤土からなり、温暖な気候にも恵まれている典型的な果樹栽培地域であった。道路改良工事によって、移転を余儀なくされた果樹畑の多くが移植された。砂丘列に集落と果樹畑が組み合わされ、当時、用宗ではすでに駅から南に向かって、集落→道路→屋敷内果樹園→道路→集落→防砂林の景観ができていた。道路網の整備と拡充、それに伴う土地区画整理事業の進行で、大正末期から、用宗地区は従来の半農半漁的な村落体制から都近郊へ大きく転換して、新しい町を形成した。

第一次世界大戦後に日本全国で労働力需要が増加し、徐々に労働力が農業以外の商業、工業、漁業、会社員などに転換していった。昭和初期の金融恐慌による農産品価格の下落、農民生活の窮迫などで、農村は一層不景気になった。家計が赤字になった零細農民は耕地を放棄する者も少なくなかった。

2.3 現在の用宗の農業

用宗は都市からある程度離れ、かつ農業生産基盤が一定程度残っている。そこには、少数であるが、夫婦で長年農業を営み続けてきた専業農家や、果樹栽培専業農家などの農業に深く関与する人々が暮らしている。しかし、住民の多数は自給的農業のみに従事している高齢者、退職者などである。

住民の話によって、用宗農業の現状をまとめてみた。山、平地ともに農地は少ない状態だという。用宗の農家の所有地は用宗地区、広野地区の平坦地以外に、城山、北にある青木、大和田、手越原などの地区の山にある。用宗では主な農作物はジャガイモ、サツマイモ、エダマメなどの野菜と柑橘類、モモ、イチゴ、ピワなどの果物である。前田米店の前田篤史氏（男性、64歳）の話によると、昔主要な作物であった米については、現在用宗では作られていないという。水田を所有している人はいるが、休耕田であるという。柑橘類は小坂、城山の山地で栽培され、ブドウやキウイなども栽培されている。モモは安倍川から用宗漁港までの海岸に分布し、ナシやイチゴは住宅地に分散しているようだ。

2.3.1 データから見る用宗の農業

『2005年 農林業センサス 農業集落別結果報告書（中部版）』によると、用宗の総農家数は28戸で、うち販売農家は8戸であり、自給的農家数は20戸である。用宗では販売農家は少なく、自給的に農作物を栽培する世帯がほとんどである。そして、用宗の農業経営体（経営耕地面積が30アール以上の規模の農業を営む者、あるいは農作業の受託の事業を営む者）数は8戸あり、すべて家族経営体である。用宗の販売農家の従業人口は20人である。その中で、65歳以上の従事者は10人である。用宗の農業従事者26人の自営農業従事日数については100日以上が多数で17人いる。

表1 各種類の経営耕地の経営体数と面積

	経営体	面積 (a)
田	3	44
畑	5	95
樹園地	6	605
計	14	744

出典：2005年農林業センサス 農業集落別結果報告書（中部版）をもとに李作成

用宗の耕地面積については、総農家の経営耕地面積は1119アールであり、うち農業経営体が所有する経営耕地総面積は744アールである。表1から用宗には田、畑、樹園地3つの種類の経営耕地があって、うち果樹栽培に利用される樹園地の面積が圧倒的に多いことがわかる。また、総農家の経営耕地面積1119アールの中で、耕作放棄地面積は95アールあり、経営耕地面積の12分の1が放置されている。耕作放棄面積については販売農家（50アール）と自給的農家（45アール）の差は大きくない。そして、樹園地の耕作放棄地が最も広く40アールである。データから見ると、用宗の野菜栽培は零細農業栽培であり、作付面積は少ない。たとえば、タマネギの作付け経営体数は3戸であり、作付面積は4アールである。ダイコンとサトイモの作付け経営体数は2戸であり、作付面積は1アール未満である。

2.3.2 漁港の農業

1877（明治10）年頃、用宗地区の土地を所有する生産主体は232戸であった。用宗の大地主は舟主も兼ね、彼らの所有する漁船が多かった。明治時代、用宗は次第に農業から漁業への発展を始めた。

用宗の生業は「半農半漁」であった。用宗の住民は、1つの世帯が1年の中で、半分の時間に農業、半分の時間に漁業と両方に従事することを「半農半漁」と考えているようだ。現在では「半農半漁」の世帯はなく、漁業を主業、農業を副業とする人もほとんどいない。しかし、漁師たちの妻などの家族が所有地で野菜や果物を栽培していることもある。前田篤史氏によると、その原因は、シラス漁期が3月から翌年の1月までなので、ほぼ1年中漁業から収入を得られることである。シラス漁のない時期は、網を修理したり、冷凍魚を干物にしたりして収入を得たりしている。清水漁港協同組合用宗支所運営委員長の斉藤政和氏（男性、58歳）によると、由比港でも仕事をする人が多く、用宗で漁がない日に由比港に手伝いに行くことも多いため、漁業だけで十分に儲かるそうだ。

前田篤史氏によると、用宗では栽培された野菜は商品として出荷することが少ない。用宗の人は生活に困っておらず、売らなくてもいいと考えているためであるという。その代わり、住民間の農作物の贈与が多く、農作物の贈与のお返しにシラスなどの魚をお礼としてもらうことも多いという。第5章を担当した行田の聞き取り調査によると、住民A氏（女性、70代）は、自分が栽培する野菜を他人にあげたり、ほかの人からもらったりし、時には漁師さんから生シラス、太刀魚、イワシをもらうこともあるそうだ。B氏（女性、30代）は近所から野菜をもらい、その代わりに多く作った料理をあげているという。農作物と農作物、魚、料理を交換するのは普通であると住民はいう。用宗では、半農半漁を続ける人は少ないが、住民の間の農作物と魚の物々交換はあり、生活の場面では小規模の農業と専業である漁業の関わりが深いことが分かる。

3 生業としての見える農

3.1 生業として栽培される農作物

用宗では商品化された農作物のほとんどはモモ、ミカンなどの果物である。用宗では1年中季節ごとにイチゴ、ビワ、モモ、ミカンなどの果物がとれる。前田憲男氏（男性、73歳）、前田征広氏（男性、41歳）の話によると、12月から5月にイチゴ、6月にビワとモモ、7月から9月にキウイとイチジク、8月にブドウ、さらに10月から12月にミカンが収穫できる。

静岡市農業協同組合長田支店の2012（平成24）年のデータによると、用宗ではミカンなどの柑橘類の栽培が多い。表2に示した通り、用宗の農協に加入している農家の中でも柑橘類、モモなどの果樹類の栽培面積が圧倒的に多いことが明らかである。また、茶畑は現

在 2 アールあるが、ほぼ管理していない状態だと長田営農経済センターの高橋直宏氏（男性、54歳）はいう。用宗周辺の地域は用宗より農耕地が多いので、ミカンの3分の2は用宗の人が周辺地区の借地や所有地で栽培している。貸倉庫、貸住宅、貸店舗のほうが高齢者にとってもっと楽で、平坦地の農地はだんだん減っていき、後継者のいない人は特に、倉庫、住宅、店舗などに転換するという。

長田農業組合直売所の長田じまん市に出品している用宗の農家は2人いて、ジャガイモ、トウガン、ダイコンなどの野菜とモモ、ミカン、カキなどの果物や、加工フルーツ、手作りお菓子を出荷しているという。

表 2 農業組合静岡市長田支店に加入する農家の農作物と面積

農作物	在来茶	柑橘類	モモ	その他の 果樹類	野菜	イチゴ	コメ	休耕地	不明 面積
面積/ アール	2	516.4	302	132	46.5	64	50	25	5

出典：農業組合静岡市長田支店の用宗の資料をもとに李作成

3.2・用宗のモモ栽培

現在用宗ではモモ、柑橘類を中心とする果物栽培が農業の中核である。用宗のモモ栽培を取り上げて、用宗の商品作物栽培を分析してみる。用宗の海岸は砂壤土で、温暖な気候にも恵まれており果樹栽培に適している。現在用宗のモモ畑は広野海岸の砂丘地に多く分布しており、下川原、小坂、城山の方にもある。第二次世界大戦終戦前には用宗に約 80 軒のモモ農家があったが、それからだんだん減ってきて今は 8 軒である。JA 静岡市の委員会として長田モモ生産委員会がある。構成員は 58 名、栽培面積は 13 ヘクタール、年間出荷量は 70 トンである。品種は「さおとめ」、「日川白鳳」、「暁星」、「白鳳」などを生産している。長田地区のモモは 6 月上旬から出荷が始まり、全国でも数少ない早出し産地であると JA 静岡市ホームページに載っている。

前田農園を営んでいる前田憲男氏は現在 16 代目の専業農家で、息子の前田征広氏は農園を継いで協力している。先祖が多く地域で土地を持っていた。ミカンは主に御前崎（御前崎市）、榛原（牧之原市）、下川原、用宗小石町、大和田、寺田に、その他にモモや一部のミカン、デコポンは長田城山中学校の近くなど、果樹園は 7 か所に分布している。前田氏の話によると、モモ栽培の 1 年間の農作業は以下の通りである。1 月に冬の剪定があり、3 月にモモの無駄な花を摘みとる作業をする。4 月に果実を選別して不良品を摘む。5 月に実に袋をかける。6 月上旬から 7 月上旬までの 1 か月はモモ収穫の時期となる。秋からまた夏期の剪定を行う。



写真1 モモの無人販売（李撮影）

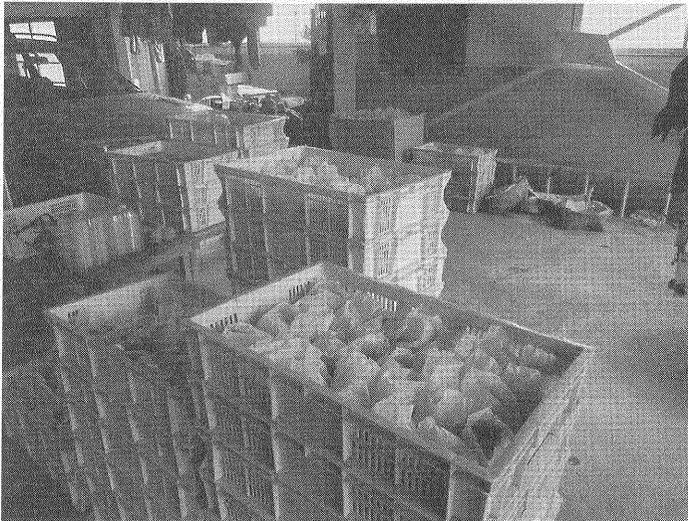


写真2 モモの出荷の様子（李撮影）

モモの販売については、用宗では農協で共同出荷をし、全国に流通することが多い。前田憲男氏と前田征広氏は前田農園を経営していて、ネット通販や常連さんへの直売もある。また、モモの無人販売も用宗地区によくある販売形式である。

用宗のモモ栽培の課題に関しては、後継者が少ないことが挙げられる。前田征広氏によると用宗の純農¹の中で、後継者がいる農家は他にいないと言った。また、桃農家C氏（男

¹ 用宗独特な言い方で、農業だけで収入を得て家計を支える農家のことを指す。

性、70代)から今は何を作っても安い、農家の報酬は少ないという意見も聞かれた。農業だけで食べていけないから、農家は農外収入が必要であるという。もっと販売方法を広げたいとの声も聞かれた。

3.3 用宗農業の課題

現在、日本の農家は共通の課題を抱えている。第一に農家の減少である。明治以降の経済発展は、農山村からの若年齢者の大量流出をもたらした。特に戦後の高度経済成長によって、農山村における過疎問題が生じた。そして、農業所得の低下から、農業人口はさらに流出し、農業従事者数が減少してきた。第二にそれと並行して進む農業就業人口の高齢化である。日本の人口は少産少死型になり、人口増加率が鈍化し、急激に高齢化社会になってきた。高橋巖によれば、65歳以上の高齢者人口である「高齢化率」が2013年6月に24.8パーセントに達した。日本の高齢者の就職や生活はどうすべきかが重要な検討課題となっている(樹形ほか編 2014)。2010年時点の販売農家における農業就業人口を見ると、2005年と比較して約75万人減少する一方、「65歳以上」の割合は3.4パーセント増加しており、高齢者として扱う「65歳以上」が61.6パーセントを占めている(須田 2006)。第三に耕作放棄地の増加である。農業の担い手の高齢化はどの地域でも進んでいるが、そうした農家の多くは農業の後継者をもたない。安定した職業に就いている農家の息子や娘たちは、休日を使ってわずかな農業所得を得るよりも、余暇を楽しむことを選択するのである。このような人たちは、定年後に親の農地を継いで農を携わることもあるし、そのまま農から離れることもある。こうした零細農家、兼業小農から放出された農地は、条件のよい農地ならば規模拡大を望む大規模農家、専業農家によって借り受けられ、条件の悪い農地ならば借り手が見つからず耕作放棄地となる。

かつて、用宗の農耕地は広がった。江戸時代には青木川の東側、丸子川から小坂の町潮除堤までは全て用宗村田地だった。1907(明治40)年に用宗地区の住民は322戸であり、そのうち農家は53戸であった。昭和初期には城山、海岸付近に果樹園、畑が広がっていた。昭和30年代に急速に家屋敷が増加し、農業以外に兼業を営む人も増加した。昭和40年代には、漁業が中心だったが、平坦地には水田があり、農作物は商品として売られた。昭和50年代にさらに用宗の都市化が進み、商店街や近代的設備が充実していく一方、農業従事者が減り、農耕地の面積も減少した(安本編 1971)。現在では用宗地区の農耕地は主に、城山と住宅地に分散している土地である。ナシ畑、水田がなくなって、カキ畑、野菜畑も姿が消えてしまったという。

農耕地の減少は農業従事者の減少と土地利用構造の変化に両方関わると思われる。用宗では、農業従事者が減少する理由としては、少子高齢化で農業労働人口の減少や農家収入の減少が挙げられる。高齢化した社会では農業従事者が農作業に耐えられず、山登りや消毒などができなくなり、後継者もいなくなりつつあるため、耕作放棄面積も増えてきたと考えられる。用宗をよく訪れるという杉山兼晴氏(男性、62歳、広野在住)によると、農

作業には手間がかかるが、労働投入に相当する所得はない。消毒、出荷、保存に費用がかかるから、収入の4割は農業の資材費になる。そして、農業は収穫周期が長い。そのため、短時間で楽に収入が得られる貸倉庫などを選択するという。

土地利用構造からみると、用宗港ができた後に用宗の風景は一変した。その前に漁港の西方向の地域から東の安倍川までは全て農地だった。漁港の建設とともに水田とである低湿地は埋められ消滅した。それから、用宗は都市中心地に近く、気候が温暖で、住みやすいため、土地の住宅化がどんどん進んでいくと考えられる。住宅や倉庫が建てられ、あるいは不動産屋に任せていると利用され、農地はさらに減っていく。

その他、農地が減る理由については、近隣に住宅が増え、洗濯ものを汚さないよう、消毒ができなくなったこと、農業は朝早い時間から活動するため、騒音が近所の人に迷惑になるかもしれないと遠慮するなどの原因も挙げられた。

4 生活のための見えない農

4.1 見えない農の特徴

用宗では、農作物を栽培することの多くは生業とみなされていない。それはむしろ、生活の一部であり、非経済的活動だと考えられている。私はそれを「見えない農」と呼ぶ。「見えない農」の特徴としては、①用宗では「見えない農」は「見える農」より多数であり、用宗住民の多くは自給的農業のみに従事している高齢者、退職者である。②農地は、もともと砂丘に位置することが多かったが、明治時代から、道路改良工事によって土地区画整理事業がともに進行し、今は住宅地となり、そのあいまに小さな畑として残っている。また自宅の庭の一部を畑とする。③目的は金銭を儲けるためではなく、家庭消費や近所の人への農作物のおすそわけ、漁師への農作物のおすそわけと魚のお返しはよくある。④小規模であり、労働力の投入や農地などの資本は少ない。⑤用宗の代表的なミカン、モモなどの果樹以外に、旬の野菜を栽培する。⑥生業ではなく、趣味や「遊び」との意識が強い。

用宗の「見えない農」をしている用宗住民の例を見てみよう。D氏（男性、70代）の場合は、50年前まで、父親の世代は半農半漁だった。現在青木地区と用宗1丁目に土地を所有している。30年くらい前は青木の土地でミカンを栽培していた。今は工場ができて、貸倉庫に立て替えたそう。用宗1丁目の所有地は、30年前は田圃でコメを作っていたが、今は放置されている。現在、自宅の庭にニンニク、ジャガイモなどの野菜や、果樹はモモ1本とミカン数本を栽培している。「お遊び」のように農作物を栽培していると言った。また、もう1人のE氏（女性、60代）の場合は、現在用宗の砂畑にモモを栽培していて、ミカン畑も持っている。自宅の庭にネギ、キュウリなどの野菜を植えている。自家消費以外に家の玄関に無人販売機を設け、近所の人に売っている。

「見えない農」は家庭での消費のため、所有地や自宅の庭で少数の野菜や果物を栽培す

る零細で小規模な行為である。目的は経済的な収入ではなく、家庭消費の必要、所有地の利用と、生活の一部である「趣味」「お遊び」のような日常活動が動機だと考えられる。収穫した農作物の余った部分は他の住民たちにおすそわけしている。栽培された野菜、果物は商品として出すことが少ないが、無人販売機を設けて売り出したりしている人もいる。住民たちの中の農作物と農作物のおすそわけの交換、農作物と魚のおすそわけの交換を通して用宗住民は人間関係を作り、農業と漁業が結ばれて、小規模の農業と専業漁業の関わりが深くなることが分かる。



写真3 庭に栽培している野菜（李撮影）

4.2 近郊農業との比較

近郊農業とは都市の周辺で行われる農業である。高地価、人口高度集中化に対応し、生鮮度の高い野菜、花、生乳などを提供する（都市近郊農業研究会 1977）。近年近郊農業の環境条件が著しく変化してきた。具体的に言えば、①輸送手段の発達による時間距離の短縮、②都市部と農村部の区分線の消失、都市部と農村部の入り組み状態地帯の増加、③兼業化の進行による近郊農村、集落の変質、④農業技術の革新による大規模利益の発現、⑤市場取引単位の大型化、などの変化があった。用宗は静岡市の近くに位置し交通が便利で、都市への輸送条件は非常に良いことは明らかなが、農業従事者が少なく、農耕地の面積が減り、小規模の零細農家はほとんどであるため、大量な農作物は提供できず、近郊農業としての発展はしていない。

5 おわりに

用宗地域では農業の歴史は古いが、地租改正などの土地制度の改変や、漁港の開設などのインフラ整備と共に漁業が発達していき、耕地所有量や利益の格差の拡大、農業従事者の減少などによって、農業は衰退してきた。過去には農業中心な時代もあったが、今ではほとんど消滅しつつあり、現在漁業が生業の中心である。「見えない農」という生活の一部であり、非経済的な農的活動は、用宗の農業の特徴になっている。「純農」ということも「今はとても珍しくなってしまった」という意味で使われていると考えられる。

用宗農業衰退の原因は多様である。歴史的な流れでもあるが、現在では半農半漁の世帯はほとんどなく、農業と漁業の両方で生計を立てている人や、漁業を主業、農業を副業として携わっている人はほとんどいない。その理由としては、シラス漁を中心に漁業の漁期が3月から翌年の1月までで、ほぼ1年中漁業に従事することが可能なことが挙げられる。それから、農業収入が低いため、わざわざ販売することもない。そして、用宗の農業は農耕地減少や後継者不足などの課題も抱えている。用宗では農業人口の高齢化が進む一方、後継者がいないため、放棄農耕地が増加し、あるいは住宅地や、倉庫用地になってしまう。農家にとって農産物を栽培するより、短時間で楽に収入が得られるため、農業従事者はますます減っていくと考えられる。用宗は現在、日本中の農家と共通の課題を抱えているといえる。

用宗は都市近郊にあり、交通の便もよいことから、宅地開発が進んできた。その中で、漁業が発展するのと平行して専業農家が減少し、「見えない農」だけが残っている。

農産物の商品化と流通は地域振興に役立つとともに、地域振興が農産物の商品化を進める効果がある。農産物の地域ブランド化は観光客を呼び寄せると同時に、地域振興が進むと、現地のイベントで農産物の知名度向上が実現できると考えられる。農産物の地域ブランド化は、産品を遠くまで送り届ける「旅券」効果を持つと同時に、観光客を呼び寄せることで地域振興にも役立つと主張する(須田 2014: 71)。用宗の「見える農」は一定の農産物の産量、出荷が確保できるため、町内のイベントであるなぎさ市や海開きなどに出品して、用宗で育てたモモや、ピワなどの果物を出品し、用宗を訪ねてきた外部の人に知ってもらうべきではないだろうか。地域おこしの展開と共に、漁港のアピールと合わせて用宗農業の魅力を表現するのが望ましいと思われる。また、農と食の関係を深めて、シラスなどの海産物以外に用宗現地産の農産品を使った料理を考えて、農と食、食と人の交流を作る中で、用宗の「見える農」が発展できると思われる。現在、広野6丁目のレストラン「ラ・ペーシュ」では季節限定でモモ冷製スープがメニューに入っているという。また、農と食と人、自然と食と人の交流を深め、農作物生産者と消費者の関係を結び付けて、農園の面積や立地などの条件が確保できるところではミカン狩りやモモ狩りのような体験的な農業が望まれる。

高橋徹によれば、現在、「新規就農」の多くは、農家世帯員の後継者が兼業先の仕事を減

らして、あるいはやめて、新たに農業に従事するようになった場合でありこの新規就農の多くを占めるのが、「定年帰農者」である（高橋 2014）。実際に用宗の「見えない農」の従事者の多数も他産業の定年者で、自宅の庭や所有地で野菜と果樹を栽培する人びとである。用宗では、集落と農地が入り組み、屋敷内の果樹園や、野菜畑といった土地利用景観がよく見られる。このような小規模の家庭消費のための農作物栽培は商品経済ではないが、農作物と農作物、農作物と魚のおすそわけを通して用宗住民と農業、漁業をむすびつけている。「見えない農」は非経済的な農ではあるが、用宗住民たちの人間関係を築くことに大きな役割を果たしているし、地域振興の要素としても十分利用可能であるように感じた。用宗の「見えない農」を続けるためには、現在農業の若年担い手が確保できない状況の中で、定年帰農者の増大をめざして、中高年への就農支援が望まれる。

謝辞

今回のフィールドワークにおいて、用宗地区の多くの方々にご協力いただき、誠にありがとうございました。また、インタビューさせていただいただけでなく、貴重な資料もいただきました。用宗地区の皆様全員に心から御礼を申し上げます。

参考文献

長田村役場

1921 『安倍郡長田村誌』長田村役場。

関東農政局静岡農政事務所統計部

2005 農林業センサス 農業集落別結果報告書（中部版）。

静岡地方気象台

2014 静岡地方気象台ホームページ（2014年7月14日取得、
<http://www.jma-net.go.jp/shizuoka/index.html>）。

JA 静岡市

2014 JA 静岡市ホームページ（2014年7月15日取得、
<http://shizuoka.ja-shizuoka.or.jp/>）。

生源寺眞一

2002 『21世紀日本農業の基礎構造』農林統計協会。

須田敏彦

2006 『日本農業の基本理論』農林統計協会。

全国農業協同組合中央会

1996 『市民農園をはじめよう』農林統計協会。

都市近郊農業研究会

1977 『都市化と農業をめぐる課題』農林統計協会。

高橋巖

2014 「農の担い手——その多様なあり方」榊形俊子・谷口吉光・立川雅司編『食と農の社会学 生命と地域の視点から』ミネルヴァ書房、221-222。

用宗町内会

2014 用宗町内会ホームページ（2014年7月14日取得、
<http://www4.tokai.or.jp/mochimune/>）。

安本博編

1971 『用宗町誌』用宗町誌編集委員会。